六朝漢語研究

－「佛説菩薩睒子經」の場合－

佐　藤　利　行

【キーワード】六朝漢語、漢訳仏典、佛説菩薩睒子經、増壹阿含經

はじめに

六朝漢語の研究について、森野繁夫博士は次のように述べておられる（注①）。

六朝期の文章には、①史伝の体　②書簡など個人の文の体　③古小説など説話の体　④訳経などの体、に大きくまとめることができそうである。分類の基準は、後漢以来の新しく作られた語彙――それは口語からの吸収と、文士による作成という両面が考えられるが――それをどの程度取り入れているか、また従来の文章にみられぬ語法――それは口語の影響と考えられるが――それがどの程度みられるか、という点にある。

新しい語彙・語法は、その文章が書かれた目的、つまり内容のちがい、および、作者の文章観・文体のちがいによって、取りいれ方に差が生じてくるわけであるが、特に訳経の場合は新造の訳語もかなり使用されているものと推定され、そのくりかえしの多い独自の表現とあいまって、他の文体といささかかけ離れた存在となっている。

今回、取り上げる「佛説菩薩睒子經」は上記の分類によれば④訳経などの体、になるが、六朝期の漢語の特徴が「佛説菩薩睒子經」にもどのように現れているのか、具体的に検討してみたい。

1　「佛説菩薩睒子經」について

「佛説菩薩睒子經」は、釈尊が比羅勒國において比丘たちに説いた故事である。その内容は、釈尊が過去世で自らが一切妙菩薩であった時に、盲目の長者夫婦を憐れみ、天上から下世して夫婦の子（睒）となって孝養を尽くしたというもので、全文は以下の通りである（注②）。

佛説菩薩睒子經

安公録中闕譯今附西晉録

聞如是。一時佛在比羅勒國。與千二百五十比丘及衆菩薩國王大臣人民長者居士清信士女不可稱計。一時來會。佛告諸比丘。皆悉寂靜定意聽。我前世初求得菩薩道時。戒行普具精進一心。修集智慧

行於善權。功德累積不可稱説。諸天釋梵天龍鬼神帝王人民無能行者。阿難聞佛言。更整衣服長跪叉手。白佛言。願欲聞之。

佛告阿難。乃往過去無數世。時有菩薩名曰 一切妙。仁慈惠施救濟群生。常行四等心度世危厄愍育苦人。時於兜術天上教授天人。常以晝夜各三時定意。思惟三界。照觀十方天下人民善惡之道。知有孝順父母奉敬三尊。恭順師長修諸功德者。常以天眼遍察五道。時有迦夷國。中有一長者孤無兒子。夫妻兩目皆盲。心願入山求無上慧。修清淨志信樂空閑。菩薩念言。此人發意所學微妙。而兩目無所見。若入山中者或墮溝坑。或逢毒蟲所見枉害。若我壽終爲其作子。供養父母終其年壽。於是菩薩壽盡。即下生爲盲父母家作子。父母歡喜甚愛重之。本發大意欲行入山。以生子故。便留樂世間。子年七歳號字曰睒。睒至孝仁慈奉行十善。不殺不盗不婬不欺誑。不飲酒不妄言不綺語。不嫉妬不呪詛。信道不疑晝夜精進。奉事父母如人事天。言常含笑不傷人意。行則應法不妄傾邪。父母喜悦無復憂愁。年過十歳。睒長跪白父母言。本發大意欲入深山。求志空寂無上正眞。豈以子故而絶本願。人在世間無常百變。命非金石對至無期。願如本意宜及上時入山清淨。我自尋隨與父母俱。供養隨意不失時節。父母報睒言。子之孝順天自知之。不違本誓便共入山。

睒即以家中所有之物。皆施國中諸貧窮者。便與父母俱共入山。睒至山中以蒲草爲父母作屋。施作床蓐。不寒不熱恒得時宜。適入山中一年。衆果豐茂食之香甘。泉水涌出清而且涼。池中蓮華五色精明。栴檀雜香樹木豐茂倍於常時。風雨時節不寒不熱。樹葉相接以障雨露。蔭覆日光其下常涼。飛鳥翔集奇妙異類。皆作音樂之聲。以娯樂盲父母。師子熊羆虎狼毒獸。皆自慈心相向無復相害之意。皆食噉草果無恐懼之心。麞鹿熊羆雜類之獸皆來附近睒。音聲相和皆作娯樂之音。睒至孝慈心履地常恐地痛。天神山神皆作人形。晝夜慰勞三道人。三道人一心定意無復憂愁。睒常與父母。取百種果蔬以食父母。恒有盈餘。渴飲泉水無所乏短。父母時渴欲飲。睒著鹿皮之衣。提瓶行取水。麋鹿衆鳥亦復往飲水。不相畏難

時有迦夷國王入山射獵。王遙見水邊有麋鹿。引弓射鹿。箭誤中睒胸。睒被毒箭擧身皆痛。便大呼言。誰持一毒箭射殺三道人者。王聞人聲即便下馬往到睒前。睒謂王言。象坐牙死。犀坐其角。翠爲毛故。麞鹿爲皮肉故。今我無角無牙無毛。皮肉不可噉。我今坐何等罪死耶。王問睒言。卿是何等人。被鹿皮衣與禽獸無異。睒言。我是王國中人。與盲父母俱來入山中。學道二十餘年。未曾爲虎狼毒蟲所見害。今便爲王所射殺。登爾之時。山中大風暴起吹折樹木。百鳥悲鳴。師子熊羆走獸之輩皆大號呼動一山中。日無精光流泉爲竭。衆華萎死雷電動地。時盲父母驚起自相謂言。睒行取水經久不還。將無爲虎狼毒蟲所害。禽獸悲鳴音聲號呼不如常時。風起四面樹木摧折。必有災異。王時怖懐大自悔責。我所作無状。我本射鹿箭誤相中耳。射殺道人其罪甚重。坐貪小肉重受其殃。我今以一國珍寶庫藏之物宮殿妓女丘郭城邑。以救子命。時王便前以手挽拔睒胸箭。箭深不可得出。飛鳥走獸四面雲集號呼。動一山中。王益惶怖三百六十節節皆動。睒語王言。非王之過。自我宿罪所致。我不惜身命。但憐念我盲父母。年既衰老兩目無所見。一旦無我亦當終歿無所依仰。以是之故。用自懊惱酷毒耳。登爾之時。諸天龍神山神水神樹神皆爲肅動。王復重言。我寧入泥犁中百劫

受罪。使睒身活。長跪向睒悔過言。若 子命終我當不復還國。便住山中供養卿父母如卿在時。勿以爲念。諸天龍神皆當證知。不負此誓。睒聞王此誓言。雖被毒箭心喜意悅。雖死不恨。以我盲父母累王供養。道人現世罪滅得福無量。王言。卿語我父母處。及子未死語我知之。睒即指示語。從此步徑去是不遠。自當見一草屋。我父母在其中止。王徐徐往勿令我父母怖懞。以善權方便解語其意。爲我上謝父母。無常今至當就後世。不惜我命但念父母年老兩目復盲。一旦無我無所依仰。以此懊惱自酷毒耳。死自當分。宿罪所致無有得脫者。今自懺悔於父母。從無數劫以來所行衆惡於此罪滅福生。願我與父母世世相値不相遠離。願父母終保年壽。勿有憂患。天龍鬼神常隨護助災害消滅。所欲應意無爲自然。王便將數人徑詣父母許。王去之後睒便奄然而死。飛鳥禽獸皆大號哭。遶睒尸上以舌舐睒身血。盲父母聞此音聲益用怖懼徬徨而住。王行馳駃觸動草木肅有人聲。父母驚言。此是何人非我子行。王言。我是迦夷國王。聞道人在山中學道。故來供養道人。父母言。大王來大善。勞屈威尊遠臨草野。王體中安隱不。宮殿夫人太子官屬人民皆安善不。風雨和調五穀豐足不。隣國不相侵害不。王答道人言。蒙道人恩皆自平安。王問訊盲父母。來在山中勞心勤苦。樹木之間。飛鳥走獸無有侵害道人者不。在山中寒暑隨時現世安隱不。盲父母言。蒙大王厚恩常自安隱。我有孝子名睒。常爲我取百種果蓏。泉水恒自豐饒。山中風雨和調無所乏短。我有草席可坐果蓏可食。睒行取水且欲來還。王聞盲父母言。又大傷心淚出而言。我罪惡無狀入山射獵。見水邊有群鹿。引弓射之。箭誤中道人子。睒身被毒箭甚痛故。來語二道人。父母聞之擧身自撲。如太山崩。地爲震動。王便自往前扶牽。父母仰天號哭自訴言。我子睒天下至孝仁慈無有過者。踐地常恐地痛。今有何罪而王射殺之。向者大風卒起吹折樹木。百鳥悲鳴號哭動一山中。我在山中二十餘年。未曾有此災異。疑我子取水經久不還。必當有故。諸神皆驚肅肅而動。母啼號不可復止。父言且止。人生無有不死者。無常自然不可得却。且問王言。睒爲射何許今爲死活。王具以睒口中所言。向盲父母說之。聞王此言。又大感絶。我一旦無子俱亦當死。願王牽我二人往臨睒尸上。王即牽盲父母往到尸上。父抱其兩脚。母抱其頭著膝上。各以一手捫摸其胸箭。仰天大喚言。諸天及龍神山神樹神水神。我子仁慈至孝諸神所知。何能不一哀我子是善子。母便以舌舐睒胸瘡。願毒入我口。我年已老目無所見。以身代子之命。睒活我死死不恨也。於是盲父母言。若睒有至誠至孝者。天地所知。箭當拔出毒藥當除。睒當更生。於是第二忉利天王釋座即爲大動。以天眼見二道人抱子號哭。乃聞第四兜術天諸天宮龍宮皆儼儼而爲動。釋梵四天王即從第四天上來如人伸臂頃。來下住睒前。以神藥灌睒口中。藥入睒口。箭自拔出便活如故。父母驚喜。見睒已死更活兩目皆開。飛鳥禽獸皆作歡樂之音。風息雲消日爲重光。泉水涌出。衆華五色樹色光榮倍於常。時王大歡喜不能自勝。禮天帝釋還禮父母及子睒。願我國財以上道人。身自留住供養。現世罪滅宿怨得除。睒答王言。欲報恩者王且還國。安慰國人。皆令奉持五戒。王勿復射獵夭傷蟲獸。現世身不安隱。壽盡當入泥犁中。人居世間恩愛暫有。別離久長不得常在。王宿有功德今得爲王。莫以得自在故而自放恣。於時國王大自悔責。自今以後當如睒教勅。不敢有廢。諸隨王射獵者數百人。見睒已死神人持藥來下入口即活父母眼開。皆踊躍發意奉持五戒終身不犯。王還國已宣令國中。諸有貧窮盲父母如睒比者。皆當供養不得捐捨。

犯者令有重罪。於是國中人民以睒活故。上下相教奉修五戒。修行十善。死得昇天無入三惡道者。佛告阿難。諸來會者。宿命睒身我身是也
時盲父者。今現父王閲頭檀是也。時盲母者。今現我母王夫人摩耶是也。迦夷國王者。阿難是也。時天帝釋者。彌勒是也。使我疾成無上正眞之道決皆是我父母育養慈恩。從死得生感動天龍鬼神。父母恩重孝子所致。今得爲佛并度國人。皆由孝順之德。佛告阿難。汝廣爲一切人民説之。人有父母不可不孝。道不可不學。濟神離苦後得無爲。皆由慈孝。學道所致。佛説經已。諸菩薩比丘比丘尼優婆塞優婆夷。國王大臣人民長者居士莫不加敬。稽首佛足作禮而去。

佛説菩薩睒子經

2 「佛説菩薩睒子經」の語法について

「佛説菩薩睒子經」に見られる特徴的な語法としては、以下のようなものがある（注③)。

①「何等～（耶）？」

・我今坐**何等**罪死**耶**？（４３７－１）

我は今何等の罪に坐して死せんや？

・卿是**何等**人？（４３７－１）

卿は是れ何等の人なるか？

六朝期には、従来に見られない疑問詞として「那」「底」「云何」「何似」などがあるが（注④)、「何等」という疑問詞も、「どのような」という意味を表すもので、六朝期の文章の特徴的なものである。例えば『世説新語』雅量篇には、

・姓**何等**？ 可共語。

姓は何等？　共に語る可し。

というものが見える。

②「(為）～所見～」

受身を表す場合、従来「被」「見」などの受身の助動詞が用いられていたが、六朝期には「所見」という複合語も使われるようになった（注⑤)。例えば、以下のようなものである。

・諸葛恪・滕胤・呂據、蓋以無罪、**為**峻・綝兄弟**所見**残害。(『三国志』呉書・孫綝伝)

諸葛恪・滕胤・呂據は、蓋し罪無きを以て、峻・綝兄弟の為に残害せらる。

・得**為**先王**所見**奬飾。(『三国志』呉書・呉主伝注引『魏略』)

先王の為に奬飾せらるるを得たり。

・壺年九歳、**為**先母弟表**所見**孤背。(『晋書』卞壺伝)

壺は年九歳、先母弟表の為に孤背せらる。

また、訳経の例としては『増壹阿含経』巻四十に、

・得**為**與提和竭羅仏**所見**採決。

與提和竭羅仏の為に採決せらるるを得たり。

というものが見られる。「佛説菩薩睒子經」では、

・若入山中者、或堕溝坑、或逢毒蟲**所見**枉害。（４３６－２）

若し山中に入れば、或いは溝坑に堕ち、或いは毒蟲に逢ひて枉害せられん。

・未曾**為**虎狼毒蟲**所見**害。（４３７－１）

未だ曾て虎狼毒蟲の為に害せられず。

という例があり、六朝漢語の特徴的なものと言えよう。

③「～不？」

否定詞を文末に用いる疑問文は、六朝期には多く用いられている。

・（褚太傅）問庾曰、聞孟従事佳、今在此**不**？（『世説新語』識鑒篇）

（褚太傅は）庾に問ひて曰く、孟従事は佳なりと聞く、今は此に在るや不や？、と。

・彼有能画者**不**？（『右軍書記』１５）

彼に能く画く者有りや不や？

・得申近問**不**？（『右軍書記』１０５）

申の近問を得たりや不や？

・大寒。比可**不**？（『右軍書記』２４１）

大寒なり。比ろ可なりや不や？

「佛説菩薩睒子經」には、次のような例がある。

・王體中安穏**不**？（４３７－２）

王は體中 安穏なるや不や？

・宮殿夫人太子官属人民、皆安善**不**？（４３７－２）

宮殿の夫人太子官属人民は、皆な安善なるや不や？

・風雨和調、五穀豊足**不**？（４３７－１）

風雨 和調、五穀は豊足なるや不や？

・隣国相侵害**不**？（４３７－１）

隣国 相ひ侵害するや不や？

・飛鳥走獣、無有侵害道人者**不**？（４３７－１）

飛鳥歩獣、道人者を侵害すること有る無しや不や？

・在山中寒暑、随時現世安穏**不**？（４３７－１）

山中の寒暑の在りて、随時 現世 安穏なりや不や？

以上のように、「佛説菩薩睒子經」には、六朝期の漢語の特徴的な語法、すなわち「何等」といった疑問詞、「所見」といった受身の複合助動詞、「～不？」といった文末に否定詞を用いる疑問文

などの用例を見ることができる。

3 「佛説菩薩睒子經」の語彙について

六朝漢語の語彙の特徴としては、複合語を挙げることができる。今、「佛説菩薩睒子經」に見える語彙のうち、特徴的なものを示すと以下の通りである。

（副詞・その他）

・麋鹿衆鳥、**亦復**往飲水。（４３７－１）

麋鹿衆鳥は、亦復た往きて水を飲む。

・佛告諸比丘、**皆悉**寂静定意聴。（４３６－２）

佛は諸比丘に告ぐ、皆悉な寂静 意を定めて聴け。

・我一旦無子、**俱亦**當死。（４３７－３）

我 一旦 子無ければ、俱亦た當に死すべし。

・便與父母、**俱共**入山。（４３６－３）

便ち父母と、俱共（ともも）に山に入る。

・王聞人聲、**即便**下馬、往到睒前。（４３７－１）

王 人の聲を聞き、即便（すなは）ち馬より下り、睒の前に往到（いた）る。

・睒行取水、**経久**不還。（４３７－１）

睒は行きて水を取り、経久（しばら）く還らず。

・疑我子取水、**経久**不還、必當有故。（４３７－３）

疑ふらくは我が子 水を取り、経久く還らざるは、必當（かなら）ず故有らん。

・時盲父者、**今現**父王閲頭檀是也。（４３８－１）

時の盲父は、今現の父王閲頭檀 是れなり。

・時盲母者、**今現**我母王夫人摩耶是也。（４３８－１）

時の盲母は、今現の我が母王夫人摩耶 是れなり。

（動詞）

・一旦無我、無所**依仰**。（４３７－２）

一旦 我無くんば、依仰する所無からん。

・時盲父母驚起、自相**謂言**。（４３７－１）

時に盲父母は驚起し、自ら相ひ謂言す。

・王聞人聲、即便下馬、**往到**睒前。（４３７－１）

王は人の聲を聞き、即便ち馬より下り、睒の前に往到（いた）る。

・王即牽盲父母、**往到**尸上。（４３７－３）

王は即ち盲父母を牽き、尸上に往到る。

・王時怖懐、大自**悔責**。（４３７－１）

王は時に怖懐し、大いに自ら悔責す。

・聞王此言、又大**感絶**。（４３７－３）

王の此の言を聞き、又た大いに感絶す。

・王便将数人、**径詣**父母許。（４３７－２）

王は便ち数人を将ゐ、父母の許へ径詣る。

・睒被毒箭、挙身皆痛、便大**呼言**。（４３７－１）

睒は毒箭を被り、挙身 皆な痛み、便ち大いに呼言す。

・師子熊羆、走獣之輩、皆大**號呼**。（４３７－１）

師子熊羆、走獣の輩、皆な大いに號呼す。

・以是之故、用自懊悩**酷毒**耳。（４３７－１）

是を以ての故に、用て自ら懊悩酷毒するのみ。

・以此懊悩自**酷毒**耳。（４３７－２）

此を以て懊悩 自ら酷毒するのみ。

・風起四面、樹木**摧折**。（４３７－１）

風は四面に起こり、樹木は摧折す。

・長者居士、清信仕女、不可**稱計**。（４３６－２）

長者居士、清信仕女、稱計す可からず。

・功徳累積、不可**稱説**。（４３６－２）

功徳累積、稱説す可からず。

・皆**食噉**草果、無恐懼之心。（４３６－３）

皆な草果を食噉ひ、恐懼の心無し。

・山中大風暴起、**吹折**樹木。（４３７－１）

山中に大風 暴に起こり、樹木を吹折す。

・父母仰天、號哭自**訴言**。（４３７－３）

父母 仰天し、號哭して自ら訴言す。

・時王便前、以手**挽抜**睒胸箭。（４３７－１）

時に王は便ち前み、手を以て睒の胸の箭を挽抜す。

・地為振動、王便自往前**扶牽**。（４３７－３）

地は為に振動し、王は便ち自ら前に往きて扶牽す。

・王時**怖懐**、大自悔責。（４３７－１）

王は時に怖**懐**し、大いに自ら悔責す。

・王徐徐往、勿令我父母**怖懐**。（４３７－２）

王は徐徐に往き、我が父母をして怖懐せしむること勿し。

・盲父母聞此音声、益用**怖懼**、彷徨而住。（４３７－２）

盲父母は此の音声を聞き、益ます用て怖懼し、彷徨して住(とどま)る。

・地為振動、王便自往前**扶牽**。（４３７－３）

地は為に振動し、王は便ち自ら前に往きて扶牽す。

・泉水恒自豊饒、山中風雨和調、無所**乏短**。（４３７－３）

泉水は恒に自ら豊饒、山中 風雨は和調し、乏短する所無し。

・各以一手、**捫摸**其胸箭。（４３７－３）

各おの一手を以て、其の胸の箭を捫摸す。

これらの語彙のうち、やはり六朝期の漢訳仏典である「増壹阿含経」（『大正新修大蔵経』）における語彙（注⑥）と比較すると、共通するものとして以下のような例が見られる。

（副詞・その他）

・如来者、無此欲愛、永滅無餘、瞋恚愚癡、**亦復**如是。（５８９－３）

如来は、此の欲愛無く、永滅 餘り無く、瞋恚 愚癡も、亦復た是の如し。

・是時釋提桓因所将玉女、**亦復**如是。（５９４－１）

是の時、釋提桓因 将ゐる所の玉女も、亦復た是の如し。

・爾時天及人民、**皆悉**熾盛。（５６１－３）

爾の時、天及び人民は、皆悉な熾盛なり。

・是時長生太子、與王共作言誓、**俱共**相済命者、終不相害。（６２８－２）

是の時、長生の太子は、王と共に言誓を作し、俱共に相ひ済命する者、終に相ひ害ぜず。

・爾時梵摩達王、**即便**興兵、往罰其国。（６２６－３）

爾の時、梵摩達王は、即便ち兵を興し、往きて其の国を罰す。

これら「亦復」「皆悉」「俱共」「即便」などは、意味の同じ副詞を組み合わせて二字の熟語にしたもので、六朝期には多く見られる漢語である。特に漢訳仏典では口調を整えるために多用したものと思われるが、もともとは口語で使用された漢語であろう。

例えば、「佛説菩薩睒子經」に見られた「必當」という語彙は、「必」「當」それぞれ一字でも当然の意を表す語であるが、六朝期の口語では、こうした語を重ねて用いることが多かったようである。王羲之の書翰文の中には、このような例を多く見ることができる（注⑦）。

・此人、**須當**令泥。（４２３）

此の人、須當(すべから)く泥ましむべし。

・汝**當須**過。殯還。恒有悲惻。（５７）

汝は當須(まさ)に過ぎるべし。殯の還る。恒に悲惻すること有り。

・**宜須**一用心吏。可差次忠良。（２９４）
　宜須しく一に心を吏に用ふべし。忠良を差次す可し。
・**政當**與君前期会耳。（２７６）
　政當に君と期に前だちて会すべきのみ。
・若可得耳。**要當**須吾自南。（７１）
　得可きが若きのみ。要當ず吾の南よりするを須つべし。

次に、「増壹阿含経」にも見られる共通の動詞としては、以下のような例がある。
（動詞）
・是時六千梵志、見世尊作如此神変、各自自相**謂言**。（６６４－２）
　是の時、六千の梵志は、世尊の此の如く神変するを作すを見、各自自ら相ひ謂言す。
・爾時舍彌夫人、将百女人等、**往到**此林。（６６７－１）
　爾の時、舍彌夫人は、百の女人等を将ゐ、此の林に往到る。
・猶如良牛入牛衆中、而自**稱説**我今是牛。（５８０－１）
　猶ほ良牛の牛衆の中に入るが如く、而も自ら我は今是れ牛なりと稱説す。
・均頭是時、三自**稱説**、七覚意名。（７３１－３）
　均頭是の時、三たび自ら稱説し、七たび意名を覚ゆ。
・汝自**稱説**、造無数福、誰為證知。（７６１－１）
　汝自ら、造めて数福無しと稱説するも、誰が為に證知せん。
・彼人不能**食噉**、亦不與妻子、亦不與奴婢。（５８７－２）
　彼の人は食噉する能はず、亦た妻子と與にせず、亦た奴婢と與にせず。
・彼得已、便自**食噉**、不起想著之意。（５９９－３）
　彼は得已り、便自ち食噉し、想著の意を起こさず。
・使此人民、得**食噉**之、又使聖衆、得充気力。（７４９－３）
　此の人民をして、之を食噉するを得しめ、又た聖衆をして、気力を充たすを得しむ。
・時尊者難陀、聞此語已、便懐**怖懐**、衣毛皆竪。（５９２－２）
　時に尊者難陀、此の語を聞き已り、便ち怖懐するを懐ひ、衣毛皆な竪つ。
・糧食**乏短**、而給施食。（５６４－２）
　糧食乏短し、而して食を給施す。
・事事供給、無所**乏短**。（６１０－２）
　事事供給し、乏短する所無し。

また、訳経ではないが、やはり六朝期の資料から以下のような共通の語彙を見出すこともできる。
・蒯氏大自**悔責**、請救于帝。（『世説新語』惑溺篇）

蒯氏は大いに自ら悔責し、救ひを帝に請ふ。

・喬元為司空長史、……因起自往、手**捫摸**之、壁自如故。(『搜神記』三)

喬元は司空長史と為り、……因りて起ちて自ら往き、手づから之を捫摸するも、壁は自ら故の如し。

おわりに

以上、今回は六朝漢語研究の基礎作業として「佛説菩薩睒子經」を取り上げ、そこに用いられている漢語の語法・語彙について六朝期の特徴を見ていった。その結果､それほど長くはない｢佛説菩薩睒子經」の中にも、六朝期の口語系の語法や語彙を多く見出すことができた。特にやはり漢訳仏典である「増壹阿含径」とは共通する語彙が多く含まれていることが分かった。

六朝訳経の語彙については、森野繁夫博士は次のようにも述べておられる（注⑧)。

一般的に見て、訳経に用いられたのは、どのような中国語であったのか。「高僧伝」巻四の末に付す「論」には、中国の訳経の歴史が述べられているが、その中に次のように言う。

爰至安清・支讖・康会・竺護等、並異世一時、継踵弘賛、然夷夏不同、音韻殊隔、自非精括詁訓、領会良難、

属有支謙・聶承遠・竺佛念・釋宝雲・竺叔蘭・無羅義等、並妙善梵漢之音、 故能尽翻譯之致、一言三復、辞旨分明、然後更用此土宮商、飾以成製、論曰、 随方俗語、能示正義、於正義中、置随義語、蓋斯謂也。

これによれば、原典の個有名詞や佛教用語については、元の音を忠実に表現すべく新しい語が造られたであろうが、それ以外の語は「方俗の語に随いて、能く正義を示す」という態度で翻訳がなされた。

「方俗の語」とは、梵文に対して中国語を指すのか､「高僧伝」にはこの他に、方言、方語、土言、とも言っている。

○（支）謙以大教雖行、而径多梵文、未尽翻譯、已妙善方言、乃収集衆本、譯為漢語、(支謙伝)

○家世西河、洞暁**方語**、華梵音義、莫不兼釋、趙正請出諸径、於是澄執梵文、念譯為晋、質断疑義、音字方明、(竺佛念)

○蒙遜、素奉大法、志在弘通、欲請出経本、讖以未参**土言**、又無伝譯、恐言舛於理、不許即翻、於是学語三年、方譯写初分十巻、(曇無懺)

「**方**言」「**方**語」「**土**言」とは、外国に対する中国ともとれるし、中国における地方ともとれる。しかし、実際は、訳者が習熟したのは、中国の北方の言語であったり江南の言語であったわけであるから、中国各地方の言語と考えてよかろう。つまり、布教の対象とした各地方の言語、それは、経典の内容をよりわかり易くするために口語的なものであったろうが、それを用いて佛典を

翻訳したらしい。

実は、今回調査の対象とした「佛説菩薩睒子經」は訳者が分かっていない。ただ、『大蔵経』には「佛説菩薩睒子經」の他に異訳として聖堅訳の「佛説睒子經」、康僧会訳の「六度集経 巻五 忍辱度無極章 第三」が収められている。こうした訳者の異なる同じ内容の訳経を比較することによって、或いは森野繁夫博士の指摘されている点も解明できるかも知れない。

六朝漢語研究の資料として、漢訳仏典の価値は非常に高い。そこには、訳者の教養や漢語能力の差によって、おのずから漢語の語彙・語法についても差異が現れるであろうが、引き続きこうした基礎作業を進めることによって、六朝漢語の特徴、さらには漢語史における中世漢語の位置づけも可能になると考える。

注

①森野繁夫「六朝漢語の研究－『高僧伝』について－」（『広島大学文学部紀要』 第三十八巻）
②テキストは、『大正新修大蔵経』（大正一切経刊行会）を用いた。
③引用文の後の数字は、テキストの頁数および段数を示す。
④森野繁夫「六朝漢語の疑問文」（『広島大学文学部紀要』第三十四巻）を参照。
⑤佐藤利行「受身形『為－所－』式試論－六朝期の資料をふまえて－」（『古田教授退官記念中国文学語学論集』東方書店）を参照。
⑥森野繁夫・佐藤利行編『増壹阿含経語彙索引』（中国中世文学研究会）を参照。
⑦佐藤利行「六朝漢語の研究－王羲之の書翰の場合－」（『安田女子大学紀要』 第14号）を参照。
⑧森野繁夫「六朝訳経の語彙」（『広島大学文学部紀要』第三十六巻）

六朝漢語研究

ー 關 於 《 佛 說 菩 薩 睒 子 經 》ー

在六朝時期的文章中,經常可以看到後漢以來新造的詞彙、語法。我們可以推測,在漢譯佛典中,更是應該運用了大量新創的詞彙作爲譯語。

此次，通過研究《大正新修大藏經》中所收《佛說菩薩睒子經》的語彙、語法，試以對六朝時期的漢語特徵進行探討。